



ふるさと見て歩き

れんざん こうえきぜん じ
連山交易禅師



▲連山禅師生誕三百年記念碑と伝邸宅跡
(石碑のうしろ)

今から三百五十年ほど前の江戸時代前期、水戸藩領を中心に活躍した御前山生まれの禅僧、連山交易禅師の足跡をたどります。

◇曹洞宗の発展に尽した連山

連山禅師は寛永十二（一六三五）年八月十五日、御前山地域上伊勢畑沼ノ上の地で生まれたといわれています。父は岸四郎右衛門で、この一代前から上伊勢畑に移り住んだと伝えられます。幼少の頃から仏教への向学心を見せていた連山は十三歳で浅草に養子に出されましたが信仰心を捨てず、三年で故郷に帰り、長倉の蒼泉寺で出家を果たしました。ここで水戸藩の郡奉行を務めていた矢野九郎右衛門長重にその才能を見出され、援助をうけること

になります。二十才で京都に遊学し、宇治の興聖寺に万安和尚を訪ねました。万安和尚は江戸時代における曹洞宗中興の祖といわれた名僧で、曹洞宗の教義や規律が乱れていることを嘆き、大寺院からの招きを断り、興聖寺を根拠に教学の建て直しを企図しつつ、布教活動を行っていました。高い理想と厳しい理念の下に曹洞宗を再興しようとしていた万安は連山に出会い、宗派の将来に光を見出したといえます。連山もまた万安から多くのことを学び二年後に帰郷すると禅の教典の講義や注釈の執筆を精力的にこなす。竜谷院（城里町）、蒼竜寺（水戸市）を経て大雄院（日立市）住職となり二十年の日々を修行に明け暮れました。続

いて大中寺（栃木市）に入って曹洞宗の僧録司（全国の曹洞宗寺院の完務を統括する役職）となり、永平寺・総持寺の本山に次ぐ位の寺院を任されることとなったのです。しかし連山はひたすらに宗風の復興を願うのみで役職や栄誉を嫌い、僧録司就任についても深く後悔する気持ちを表した漢詩を多く詠んでいます。自責の念にさいなまれつつ二年を過ごす中大寺を去り、光圀の招きを請けて天徳寺（常陸太田市）の住職を務め、光圀との親交を深めつつ、著述活動を展開し六十歳で亡くなりました。

◇連山禅師を慕う人々

連山禅師の墓は上伊勢畑沼ノ上の岸氏の墓所内にあります。

宗派を超えて仏教を学び、人々に教え広めることに努めた連山禅師はいつしか学業成就に霊験あらたかであるといわれるようになりました。昭和十一年には青年会によって生誕三百年記念碑が住居跡といわれる場所に建てられました。「原」と呼ばれるその地はテラス状になっており、邸宅跡という伝承もうなずけます。今から四十〜五十年ほど前までは年に一度、連山禅師のお祭が行われていました。旧暦の八月十五日に上伊勢畑地区全体で行われたもので、中でも青年会の働きが大きかったようです。禅師の生誕三百年記念碑の前



▲連山が16才で出家した長倉蒼泉寺

に賽銭箱が置かれると、喜捨をする人々が絶えなかつたといえます。この石碑から禅師の墓所まで「お灯笼付け」が行われ、青年会が梨を売ったりするなど大変な賑わいだっただけです。そしてその頃まで地元の人々は連山禅師を「コーギョシサマ」（「交易和尚様」が訛った？）という名で親しみを込めて呼んでいました。子どもたちがコーギョシサマの石碑に腰掛けたり落書きをしたりすることを大人たちは決して許さず、「勉強ができなくなる」と言って戒めました。今は墓の周りも荒れてしまっていますが、再び子どもたちに学ぶことの大切さを伝えたがっているのではないのでしょうか。

* 正田スミ子氏に聞き取り調査に御協力いただきました。
(歴史民俗資料館)